荻窪の桜

令 和 6 年 度
杉並区立松溪中学校
SHOU KEI
松溪だより
祝入学号
http://www.suginami-school.ed.jp/shoukeichu/

教育目標
○自 学・自 立
○思いやり・感謝
○鍛　　錬

世界の平和を願って

校長　　小松　進一

―先生のおばあちゃんに「手紙」―

４月 10 日の朝日新聞に次のような記事が掲載されました。

「平和に暮らしていることは価値があり、尊いものだと感じた」。東京都杉並区立松溪中学校の３年生（現高校１年生）の授業で戦時中の学徒勤労動員の日々をつづった本誌「声」の投稿が取り上げられた。紹介した社会科の先生は、投稿した女性の孫。生徒たちは、当時と今の「戦争」に思いを巡らせ、先生のおばあちゃんに感想を送った。

太平洋戦争中、人手不足を補うために生徒たちは、農村や工場で働かされた。京都市の緒方久和子さん(95)は、高等女学校４年生の時、住んでいた島根県から広島県の呉海軍工廠(こうしょう)の寮に入れられ、金属の部品づくりや会計を担当した。呉の工廠では人間魚雷「回天」の部品を製造していたとされる。緒方さんが当時のことをつづった投稿が昨年６月１７日に「声語りつぐ戦争」に掲載され、朝日新聞ポッドキャストの番組でもインタビュー時の肉声が紹介された。

この緒方さんの孫が、松溪中学校の社会科教員の加藤入馬主幹教諭です。加藤先生はこの記事を歴史の授業で取り上げ、「回天」や防空壕(ぼうくうごう)の写真などを使って、祖母の体験がより立体的に伝わるよう工夫しました。「視覚や聴覚から、８０年近く前の歴史を肌で感じてもらいたかった」と振り返っています。

「子供が戦争に関わることを当たり前のようにさせる国や世界の状況がおかしい」「女性もこれほど厳しい日々を送っていたことは知らなかった」「本当に日本は戦争をしていたのだと手に取るようにわかった」「今、私たちが平和に暮らしてことは価値があり尊いものだと感じました」など、１０６人の生徒が感想をつづりました。また生徒の一人は、工廠の寮での暮らしや緒方さんが「遺髪」を用意したことなどを知って、戦争をリアルに感じたそうです。ウクライナやガザで戦火が広がる中、海外の人が YouTube で戦争反対を表明する動画をみて、「反対意見を出すことには勇気がいりますが、『だめなことはだめだ』と、小さな声を伝えていくことが必要だと思いました」と感想を述べています。これらの感想は、後日文集にして緒方さんに届けられ、文集を読んだ緒方さんから生徒たちに「平和をつくっていくことを考えてください」というメッセージを頂きました。緒方さんは、「世界で戦争が広がっている時に、私の文章や声が生徒の皆さんに伝わってよかった」と話されたそうです。

「世界の平和」。地球上のすべての人々が願っているはずなのに世界のどこかで戦争が起きています。この戦争によって愛する人が死んでしまい涙する人もたくさんいることを考えると心が痛みます。平和な国に暮らしている私たちこそ平和に向けて行動しなければと思っています。